

本研究は以下の三つの問いに答えることを目指して、『エチカ』における人間精神の基礎的構造の分析を行った。(1)それ自身観念として規定される人間精神が、「きわめて多くの観念から構成されている」[E2P15]とはいかなる事態を示すのか、(2)精神である観念と精神がもつ観念（＝精神が遂行する認識）はいかなる関係にあるのか、(3)観念の観念が「観念の形相」であるとされるとき[E2P21S]、この「形相」概念の意義は何か。以下ではごく簡潔にこれらの問いに答えることで、研究成果報告としたい。

『エチカ』の体系では、無限の属性から構成される神すなわち自然のみが唯一の実体であり、これら無限の属性のうち思惟と延長が含まれ、人間精神は思惟属性の様態である。そして神すなわち自然は、無限のものを無限の仕方でもつて産出する原因である。それゆえ、「精神の本性と起源について」という『エチカ』第二部の表題の接続詞「と」を重く受け止めねばならない。つまり、人間精神の本性とそのはたらきを理解するには、何よりもその起源を、すなわち精神がすべてのものの原因である神（自然）からいかに産出されるのか、より正確には、身体や他の物体をも含め、自然のうちなるあらゆるものが産出される全体的なプロセスの中で、精神がいかなる位置づけをもつのかを理解しなければならない。

さて、人間精神は人間身体を対象とする観念である[E2P11/P13]。そしてこの精神の身分規定からただちに「人間精神が神の無限知性の一部である」という帰結が導かれる[E2P11C]。

あらゆるものの原因である「神のうちには必然的に、神の本質についての、ならびに神の本質から必然的に帰結するすべてのものについての観念が」存し[E2P3]、また「神のうちにあるすべての観念はそれらの観念対象と全面的に一致する(È2P7Cより)」[E2P32D：強調引用者]。精神の本性と起源の理解は、さしあたり観念の起源と本性、とりわけ観念とその対象の関係の理解へと送り返される。無限知性の把握も含め、理解の鍵は強調部のE2P7Cである。

この系の分析の帰結のみを示そう<sup>1</sup>。神＝自然において原因が結果を産出するという事態は、原因についての前提観念から、結果についての観念が帰結として導出されることと等しい。いかえれば、事象の側での原因－結果連関は、思惟の側での前提（理由）－帰結という認識プロセスと同一の事態である。かくて「私たちが自然を延長属性のもとで、あるいは思惟属性のもとで[...]概念しようとも、私たちはひとつの同じ順序、いうなら諸原因のひとつの同じ連結[...]を見出すだろう」[E2P7S：強調引用者]。そしてこの産出連関は、現にあるのとは別様ではありえない必然性によってひとつに定まっている[cf. E1P33]。いかえれば、原因－結果の必然的産出関係こそが、観念と対象それぞれの順序と連結を同一のものとしつつ、それらを一貫した唯一の関係の形式である。そして自然全体の必然的産出連関と同一の、諸観念間の前提－帰結の必然的で無限な導出連関こそが「無限知性」には

<sup>1</sup> この系のより詳しい分析、および人間精神にかんする立ち入った解釈については、日仏哲学会において研究報告を行った（秋保亘「スピノザ『エチカ』における人間精神の基礎的構造——「表象 *imaginatio*」の理論を中心に」、日仏哲学会 2019 年春季研究大会、2019 年 3 月 23 日、於大阪大学吹田キャンパス）。

かならない[cf. E1P16]。さらに以上の議論から、すべての認識が、原因（理由）としての前提観念から結果としての帰結観念が導出（産出）される推論プロセス（「～であるがゆえに…」）のうちにこそ存することが理解されよう。

したがって、精神の本性とそのはたらきの理解は、観念の必然的な無限連鎖という根本体制の枠内で、精神である観念がいかなる位置を占めるかという、観念にかんする一種の場所論を理解することに帰着する<sup>2</sup>。そして、観念の無限連鎖のなかで精神である観念の位置を示し、また精神によって遂行されうる認識の出発点を画するのは、人間精神の「現実的有」を構成する「第一のもの」である、「現実的に実在する身体の観念」という規定にはかならない[E2P11/E3P3D]。つまり、一方で、精神によって遂行されうる認識は、身体の観念が出発点となって導出される諸観念に限定され[cf. E2P11C]、他方で精神自身は、自らのあずかり知らぬところで遂行される認識プロセスの帰結としての観念である、ということである（問い(2)）。そして冒頭の問い(1)にかかわる E2P15 は、観念の無限連鎖における帰結観念としての人間精神についての定理にはかならない。

人間身体についての観念＝認識である「人間精神」[E2P19D]は、身体を合成するきわめて多くの個体の各々についての神の認識＝観念の合成物である[E2P15D]。この人間精神であるところの神による身体の認識は、人間身体をいわば通時的に産出する他の諸物体（＝諸原因）の連鎖をたどりつつ認識し、かつ、身体を合成する諸個体の入れ替え（物質代謝や再生等：E2P13CSL4）を介して、身体をいわば共時的に維持する諸原因をたどりつつ認識する神によって遂行される[E2P19D]。したがって、精神である身体についての観念＝認識が、精神による認識の圏外に位置することになるために、このかぎりにおいて、「人間精神は人間身体を認識しない」ことが帰結する[ibid.]。それでは精神による認識の射程内に入るものは何か。それは、身体が外的諸物体との相互作用によって産出する「身体変状」である[E2P22D]。というのもこの同じ事態は、身体の観念としての精神が前提観念の一部となって、そこから変状についての観念が導出されることに換言可能だからである。そして身体変状の順序と連結にしたがって精神のうちに生じる諸観念の連結は、「記憶」いうなら表象的認識[*imaginatio*]と呼ばれる[E2P18S]。すなわち、或る身体の本性の必然性のみ由来するのではなく、その身体を取り巻く状況に依存し、それに左右される複数の変状の同時的あるいは継起的産出[cf. E2P44C1S]、つまり外的諸物体との「たまさかの遭遇」[E2P29S]に由来する表象連結は、当の身体が置かれた環境の相違に応じて多様に組織される。かくて表象像（＝身体変状）の観念連結のメカニズムは、自然のうちなる原因 - 結果の必然的産出関係、またそれと同一である無限知性の原理 - 帰結の導出連関から遊離した、個々人の経験の来歴に依存する観念連合を形成する。

こうした「たまさかの遭遇にもとづいて、このもの、あるいはあのものを観想すべく規定されるかぎり」、精神は、精神自身、固有身体そして外的物体のいずれについても「十全

---

<sup>2</sup> Cf. 上野修「身体の観念あるいは精神 スピノザにおける精神とその認識の起源的定位置」『カルテシアーナ』第三号、1981年、pp.1-31、p. 26

な認識をもたず、たんに毀損し混雑した認識」つまり非十全な認識のみを有するとされる[E2P29C/S]。こうした人間精神の所与の条件下でもなお、精神が外的諸物体についての観想からいわば身を引きはがし、自己自身のはたらきそのものに立ち返ることを可能にし、それによって、自然のうちなる原因 - 結果の必然的産出関係にそくした事象理解を可能にするもの、それが観念の「形相」としての観念の観念（＝観念についての認識）にほかならない（問い(3)）。観念の観念は、観念が「対象との関係を離れて」「思惟の様態として」、すなわち「知解することそのこと」として理解されることを可能にするからである[E2P21S / E2P43S: 強調引用者]。くわえて、原因 - 結果の必然的産出関係にそくした事象理解とは、いいかえれば、「精神がものどもをそれらの第一の諸原因を介して知得するところの、知性の順序にしたがって形成される諸観念の連結」[E2P18S]にほかならないため、この点において観念の観念は、精神における表象連結と知性という異なる観念連結の共存を可能にするものであるということもできよう。